



ネオナチキッズはなぜ、ヒップホップが好きなのか。
黒人音楽が語る、記号化の意味。

音楽の系譜は時代と二人三脚 融合と隔絶がつねに存在する

アメリカ黒人音楽は、研究対象として我々に多くの示唆を与えてくれます。アメリカ黒人のルーツがアフリカから連れてこられた奴隷にあるのは、よく知られている通り。以来、時代や文化、法を含む制度上の変化を経ても、アメリカ社会における黒人の問題はなお微妙な陰影を含んでいるといえます。ブルース、ジャズ、R&B、ヒップホップと世界の音楽に大きな影響を与えてきた黒人音楽は、そもそも書き言葉をもたず、奴隷であったがゆえに紙と鉛筆を手にするのを禁じられた彼らが、唄というかたちに記憶を込めたシャウトやスピリチュアルに始まりま

言語社会研究科助教授

新田啓子

Keiko Nitta



ウィスコンシン大学マディソン校英文学Ph.D。アメリカ文学・文化理論専攻。

小学生の頃TVドラマ「ルーツ」に衝撃を受け、

黒人文化における暴力のインパクトに興味をもち始める。

ヒップホップの研究は、ウィスコンシン大学在学中、John Fiske教授に勧められて始めたもの。

現在の研究テーマは、黒人音楽と文学における「ブラックネス」の多義性。

特にラップ・ミュージックにおけるアジア表象を分析中。

す。音楽的進化的系譜を眺めていくと、その時代時代の社会のあり方や政治性の偏差がくっきりと見えてきます。例えば19世紀末から20世紀初頭、黒人や白人、クレオール混在していたニューオリンズで発祥したジャズは、20年代のニューヨーク・ハーレムでさまざまなジャズシーンを創出。黒人が自分たちの伝統を再発見しようという意識と結びついた芸術運動、ハーレム・ルネサンスへと開花していきました。とはいえ、ハーレム・ルネサンスは商業作用として白人のジャズを生み出し、むしろ白人音楽としてのジャズの発展と共存することとなりました。

伝統への回帰は、往々にして民族意識と結びつきます。また自己表現やアイデンティティの問題とも密接に絡み合っています。それを色濃く反映したのはベトナム戦争の時代、1960年代から70年代でした。国内では差別されながら、戦争の最前線では「アメリカ」を演じることになるという分裂した経験が、黒人たちに人種的アイデンティティと自己表現への強烈な欲求を意識させました。黒人による初のレーベル「モータウン・レコード」がこの時代に生まれ、多くのインパクトある作品群を生み出していったことは、決して偶然ではありません。

黒人音楽のルーツを語る多くの資料は、実はアメリカではなくイギリスに現存しています。イギリスは19世紀中盤より、黒人が自己表現する際の避難所として機能していました。イギリスのラジオ局が放送するソウルやブルースはビートルズやストーンズを育て、そこから生まれたロックは、90年代初頭まで世界の音楽シーンに多大な影響を与えてきました。彼らが公にする黒人ミュージシャンへのオマージュは、アメリカにおけるR&Bが白人「オールディーズ」に回収されてしまった状況とは対照的です。もっとも今ではロックは白人男性の専有物になっているから、その点は等しく皮肉な現象なのかも知れません。

音楽は人間や文化を考える優れた素材 社会や言語の実相を照らす光源になる

湾岸戦争の頃、90年代の黒人音楽は20年代の再来といった活力を取り戻しました。70年代に生まれたラップを始めとす

るヒップホップはこの時代に爆発的にブレイクし、ストリートファッションやクラブカルチャーといった周辺領域を活性化させながら、世界へと拡大していきました。その一方、現在でも根深い人種差別はあります。「差別はあってはならないこと」とするアメリカ政府や文化制度はしかし、対外的イメージアップを図るべく意図的に、「黒人」の存在をアピール素材として利用することがあります。パウエル前国務長官やライス現国務長官の起用にはその効果が見られますが、彼らがどの程度マイノリティ政策の内実を反映し得ているかという点は、かなりの留保をつけて考えるべき問題です。

現代は価値のあり方や、文化的記号が意味をなす方向性がきわめて多様化した、表象の時代です。それを象徴するのが、ドイツのネオナチキッズたちの間でヒップホップやラップが流行っているという現象です。彼らはヒップホップの「バッド・ボーイ」イメージに自らを重ね合わせているのでしょうが、彼らのスタイルであるスキンヘッドは、あのKKKの白いシーツの現代版に過ぎません。60年代や70年代の黒人民族主義は、そうした記号の「間違っただけ」流用を食い止める働きをしたのでしょうか。今の文化状況にあってはむしろ、この「越境」や「流動」の結果や裾野をどう評価するかという点が、重要になっています。

こうした事象を俯瞰すると、社会や文化をどう捉えるかを考える視点をまずどのように調達するのかという問題が、すでに論争含みであることがわかります。何を素材に社会を見るか、何を手がかりとしてどう見直すか、問題をどう構成するのか、そのプロセス自体を意識的に探究することは人文科学の基本的アプローチといえます。私の研究テーマに即していえば、それは、黒人という存在がどう記号化され、イメージがどう構築されてきたのかを音楽や文学を素材とし、検証することで、思いもかけない社会や言語の実相を見出す作業だといえるでしょうか。漫然と信じていた社会や言語に関する「常識」は、作られたものであることに、私たちはもっと敏感であっていいと思います。(談)